

「心と体」と「霊と肉」—翻訳を通じて見えてくる、もう一つの「あれか、これか」

ハイデガー翻訳全集の読みづらさ

近年新たに刊行され、現在も続刊が進んでいるハイデガーの翻訳全集について、ハイデガー研究者として高名な木田元が厳しい批判を行っている⁽¹⁾。それは、ハイデガー哲学の根本概念中の根本概念である Sein をめぐりものである。Sein は通常、「存在」と訳されるが、この翻訳全集ではこの訳語の代わりにすべて「有」と訳している。ハイデガーの主著 Sein und Zeit (1927) の標題も『存在と時間』ではなく、『有と時』である。一番肝心の単語がこうも異なってくると、訳書の印象は全く違ってしまふ。木田は、この全集の監修者が道元の『正法眼蔵』第 20 「有と時」の章に結びつけて読みたいがゆえに、Sein を有としたのではないかと述べ、全集の翻訳全体をそれで統制してしまうのは、精神の自由を重んじる哲学にはふさわしくないと断じている。

私もそのように思う。第一、『有と時』では、まるで禅仏教のテキストのようにではないか。個人の訳書ならそれでも良いが、完結すれば全 102 巻にもなる大全集である。この全集全体を通じて、存在という訳語を封印してしまったため、随所で訳文に相当の無理が現れ、この翻訳全集は大変読みにくいものとなってしまった。そのせいもあってか、この大全集とは別個に、ハイデガーの新訳書はその後も次々に刊行されている。

キルケゴールの翻訳—『不安の概念』から

では、キルケゴールではどうだろうか。幸いなことに、根本的な訳語選択においては、訳書相互の間での大きな食い違いはない。ただ、キルケゴールの場合、ハイデガーにはない別の厄介さがある。というのも、キルケゴールの著作がドイツ語訳からの重訳が多く、またそのドイツ語訳著作集が二種類あるので、話が込み入っているのである。だからこそ、キルケゴールはデンマーク語原典から直接訳すべきだということになり、現に今では主要な著作や遺稿類はデンマーク語からの邦訳がほぼすべて出揃っている。ところが、実はこここのところから、キルケゴールのテキストを我々自身のテキストとして受け取り直す(反復する)という、真の哲学的課題が始まるのである。

『不安の概念』(1844 年)を例に挙げて、このことを少し考えてみたい。この本のドイツ語訳は、シュレンプフ Chr. Schrempf による旧訳(1912 年)と、ヒルシュ E. Hirsch による新訳(1958 年)とがある。前者は、ハイデガー、ヤスパース、バルトなどが読み、20 世紀初めの実存主義ブームをもたらしたものだ。和辻哲郎もこのシュレンプフ版著作集を読み、我が国初のキルケゴールの研究書(1915 年)を刊行している。しかし、シュレンプフ版は 100 年以上も前の書物なので、今では入手がきわめて困難な上に、亀の子文字の書体で書かれているため、読むのに大変骨が折れる。後者のヒルシュ版は現在ではペーパーバック版も出ており、書体も普通のローマ文字なので読みやすい。私も学生時代から読んできたのは、ヒルシュ版著作集である。

日本語訳のほうは、私が実際に手に取って確認できたものだけで、実に 6 種類の『不安の概念』があった。石中象治訳(人文書院、1948 年)、齋藤信治訳(岩波文庫、1951 年)はシュレンプフ版からの翻訳、氷上英廣訳(白水社、1964 年)は主としてヒルシュ版を用いている。デンマーク語から直接訳したのは、飯島宗享・原佑訳(河出書房新社、1966 年)、田淵義三郎訳(中央公論社、1966 年)、大谷長訳(創言社、2010 年)

である。デンマーク語訳と銘打っていても、飯島・原訳のようにドイツ語訳もかなり参照されているものもある。

「心と体」か「霊と肉」か

問題は実は微妙なところにある。というのも、翻訳以前の問題として、キルケゴール自身の言葉の使い方に浮動性が見られるのだ。ドイツ語訳はシュレンプフもヒルシュもこの浮動性をそのまま踏襲し、共に同じ訳語を用いている。例えば、第 4 章第 2 節(1)では、見出しに somatisk-psychisk (somatisch-psychisch) と掲げながら、その本文では Sjel (Seele) と Legeme (Leib) という語を使用している(カッコ内ドイツ語訳、以下同様)。また第 1 章第 5 節では、言葉を少し言い換えて det Sjelelige (das Seelische) と det Legemlige (das Leibliche) が Aanden (der Geist) の下に総合されると書かれている。つまり、キルケゴール自身が、心と体という中立的な用語を用いる一方で、霊と肉という伝統的の負荷のかかった語をも使用しているのである。

日本語訳では、somatic-psychisk は「身体的-心理的」(石中訳)、「肉体的-心的」(田淵訳)、「肉体的-心理的」(齋藤訳)、「身体的-心的」(飯島・原訳、氷上訳、大谷訳)、Sjel と Legeme は「霊と肉、魂と肉体」(石中訳)、「心と肉体」(田淵訳)、「心と身体」(飯島・原訳、氷上訳)、「霊と肉、心霊と肉体」(齋藤訳)、「心(魂)と身体」(大谷訳)、Aanden はいずれも「精神」(飯島・原訳では「精神〔霊〕」)である。

デンマーク語、ドイツ語、日本語においても、「心と体」と「霊と肉」とでは受ける印象はかなり異なる。しかも日本語の場合、Sjel を「霊、心霊」とする齋藤訳と「心(魂)」とする大谷訳の間では「霊」と「魂」の理解が反対になり、また石中訳では「霊」と「魂」を同義に用いている。霊魂はかくも浮動しているのである。なお、飯島・原訳で Aanden を「精神(霊)」としているのは、Aand (Geist) が人間と神との両方に適用され、前者では「精神」、後者では「霊」と訳される事情を背景にしているからであろう。

我々はここで、キルケゴールのテキストのただ中であって、さらにその奥にもう一つの学問的な境界領域 discrimen rerum を見出すことができるかもしれない。心に関する言葉を心霊、霊、靈魂、魂……と数え上げ、また体に関する言葉を身体、身、肉体、肉……と言い換えて、両者の組み合わせを色々と考えてみるならば、そこに無限に豊かな含意が溢れてくるように思われる。こうした有りようこそ、生身の人間存在の多義的で混沌とした様相を示していると言えないだろうか。山折哲雄は、「人間におけるところとからだという対応の関係も、元はといえば、霊と肉という、よりいっそう原初的で粗野な関係によって規定されていた」⁽²⁾とも述べている。とするならば、心身あるいは霊肉に関わるものが精神の規定の下に総合されるという事態も、キルケゴールのテキストが提起する以上の深みとダイナミズムをもって迫ってくるように思われるのである。

種々の翻訳を重層的に読み比べることで、我々はキルケゴールの問題提起を、さらなる宗教的・哲学的な人間学へと引き込むことができる。ここにテキストの読みの運動があり、その運動の中で、我々はキルケゴールと対話することが可能になるのである。

[注]

(1) 木田元『ハイデガー拾い読み』(新潮文庫、2004 年)、25～26 頁。

(2) 山折哲雄『霊と肉』(講談社学術文庫、1998 年)、13～14 頁。